

天職の探求

二〇一七年七月五日

バイブル・サービス

鈴木敏明

今日は、最近といっても、この一年くらいで感じたり考えたりしたことについてお話いたします。
天職の話の前に前段の話をしませう。

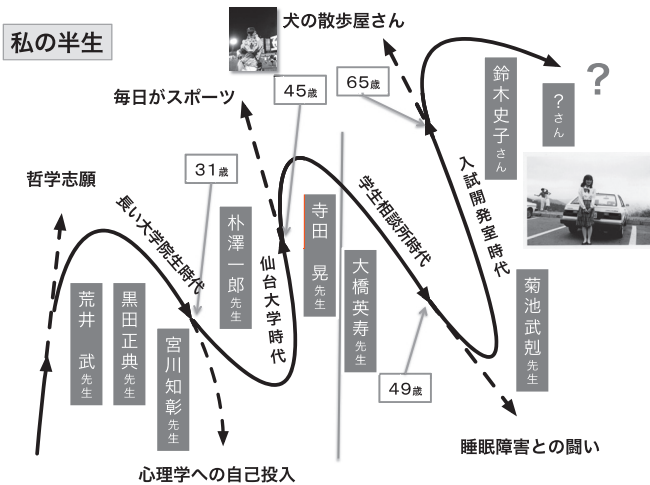
資料…『私の半生』は、昨年の三月に東北大学を定年退職する際に行った最終講義で使用したものをベースにしています。その時に、自分の半生を振り返ったチャートを作ったのですが、自分でも気に入っていて、時々見返しています。この資料では、私が大学に入学するあたりから本学に着任するまでを表示しています。「いろは坂」ではないですが、我ながらけっこう屈曲にとんだ人生を送ってきたものだと感じます。

私は大学に入学するときには哲学を志願しました。人間が怖いので、なるべく人間に触れないようにするために哲学がよいと、今にして思えば非常に馬鹿な高校生だったと思うのですが、当時は本気でそう考えていました。ですから、大学に入ってからには、「よし、哲学を勉強するぞ」といろいろな哲学関係の授業を受講しました。ところが、どの授業でも、教授の話聞いてみると、どうにもこうにも眠くなってしまうのです。さすがに「これはまじいぞ」と思いました。哲学を勉強するはずが、眠くなってしまうのですから、「どうしたらいいだろう？」とだ

いぶ困惑しました。

ちょうどその頃、一般教養で心理学の授業を履修していました。担当の黒田教授の授業は、今思うと入目的な内容だったと思うのですが、なぜかとても面白くて、この授業では居眠りもせず、皆勤賞でした。そういうことがあって、興味関心は哲学から心理学に徐々に移っていきました。専門課程に進級していろいろな先生方のお世話になり、大学院まで行き、結局は三十歳まで学生として心理学の勉強をしました。勉強は楽しかったのですが、その一方で、将来食べていくためにはどうしようという不安が常にあったのを思い出します。

そんなある日のこと、朝、仙台大学の朴澤教授から電話が来ました。「僕は今年定年退職だから、君がその後任に來ないか」ということでした。私はほぼ二つ返事でOKしました。仙台大学は柴田町にある体育系の大学です。私はそこに就職することになりました。人間嫌いで、人間が怖い私が学生指導人ですから、着任当初はとても大変でした。しかし、私はスポーツが好きで、仙台大学にはスポーツ施設・設備が何でもあるので、いろいろな種目で学生さんが相手をしてくれ



資料：私の半生

ました。自分でも男子ソフトボール部の設立に参加したりして、大いに楽しく過ごしていました。年齢も四十五歳になり、このままずっと、この大学でやっていくのだろうと思っていました。

ところが、またしてもある朝、東北大学の寺田教授から電話が来ました。先生は学部時代の指導教員です。「学生相談所のポストが空くのだけれど、後任として来ないか」ということでした。「えっ、人間嫌いで、人間が怖い私がカウンセリングですか？」と、その電話では即答はできませんでしたが、妻とも相談をして、「やってみるか」という気持ちになり、中年の進路変更に挑戦することになりました。

東北大学の学生相談所には四十九歳まで勤務しました。その間は睡眠障害との闘いでした。カウンセリングというのはなかなか大変な仕事でした。悩みを持った人と対応して、なんとかその状態を改善しましょうということなのですが、ときどき身につまされるような話を聞かされたりすると、もう他人事ではなくなり、自分の悩みのように思えてしまい、その夜は、うなされて途中覚醒を繰り返していました。隣に寝ている妻に、「パパ、どうしたの」と肩を揺さぶられ、「ああ、夢だったのか」と気がつくような日々が続きました。しかし、いやしくも心理学の専門家なのだから、きちんと対応できなければならないのだと自分に言い聞かせ、それなりの覚悟を決めて日々取り組んでいました。

そんな日々がしばらく続いたある日のこと。また、朝に電話が来ました。今度は東北大学の菊池教授からで、「東北大学で入試担当のAOセンターを新設するのでそこへ移らないか」という話でした。東北大学のAO入試というのは国立大学ではいちばん最初に始まったのですが、その立ち上げを担う専任教授として来いということでした。これは私の勝手な理解なのですが、大学という世界では、指導教員や先輩筋の言う事は尊重しなければいけないと思っていたので、新しい仕事の内容はよくわからなかったのですが、ともかく行ってみようことになりました。

当初は『栄養』センター」と聞こえたので、「私は、『栄養学』は全然わかりませんよ」と答えようと、「いや、『エーヨー』ではなくて『エーオー』なんだよ」と言われたことを覚えています。今でこそAO入試は広く行われている大学入学者の選抜方法なのですが、当時はまだまだ認知度の低い時代でした。そのセンターで、入試の企画、設計、実施、評価、広報というような仕事をずっと担当しました。そして六十五歳になり、平成二十八年三月に定年退職となりました。

定年退職後のことについては、あまり考えていませんでした。大学教員以外の別のジャンルの仕事で、何か興味を引くようなものでもあればやってみるかなといった程度のことしか考えていませんでした。例えば、私自身は犬が好きなので、定年後は犬の洋服を作ったり散歩を請け負ったりする「犬の散歩屋さん」でもやろうかな、と十二月くらいまで本気で思っていました。そんな時に妻から、「四月からどうするの？」と聞かれたので、「犬の散歩屋さんをする」と言ったら妻は怒りました。「それはだめ！ そんなことをしていたらボケちゃう！」と言われました。失礼なことを言う奴だなと思いつつも、一月頃には「これは困ったな」と思っていました。四月からどうするか全く考えておらず、何の準備工作もしていなかったからです。

そんな状況下のある朝、またまた研究室の電話が鳴りました。皆さん、覚えておいてください。「朝の電話」です。私の転機の兆しはいつも朝の電話なのです。そのときは、仙台白百合女子大学のある先生からで、「心理学の担当をしないか」ということでした。「女子大じゃどうかかな？」と思いついて、妻に相談すると、妻の方は「それはいい、ぜひお受けなさい」と言うので、お受けすることにしました。この図の右端の写真が妻です。だいぶ昔の写真です。私は、大学院生のときに家庭教師で教えていた人と結婚しました。

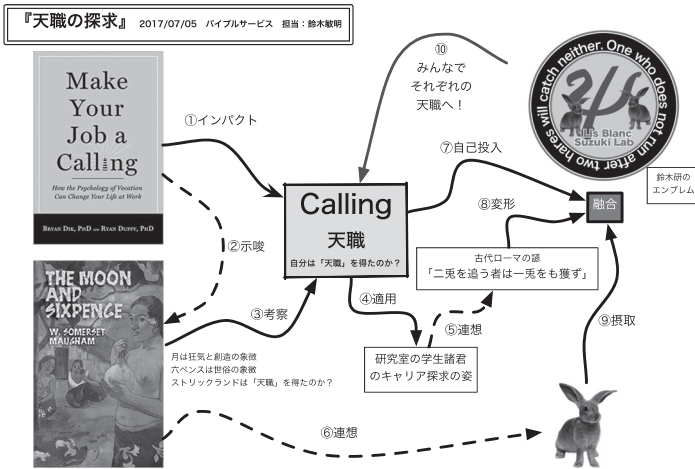
この図(『私の半生』)を見ていただくと、この辺り(東北大学時代)は全然、学生指導はしていませんでした。

仙台大学のときはしていたのですが、その後はずっと学生指導が義務ではないポストにいました。卒業論文の指導や授業担当はメインの仕事ではありませんでした。そして、昨年の四月から本学に来たわけです。すると山のような授業、卒論指導、その他のいろいろな学生指導があり、徐々に仙台大学当時を思い出させられる体験をしました。でも、そのおかげで、学生指導という仕事は意外と面白かったんだ、私は若い頃にこのようなことをしていたんだと昔を思い出しつつ、この一年を過ごして来ました。本学にはいろいろな学生さんがいて、非常に面白いです。日々、驚きの連続です。

さて、前置きが長くなりましたが、ここからが今日の本題です。以降は図・『天職の探求』を参照願います。

そんな日々を送っている時、この本(図中左上の本)に出会いました。日本キャリア教育学会という学会があります。そこが主催して、一昨年、国際学会を開催しました。その報告書をパラパラと見ていたら、ブライアン・ディクという方の報告があり、その方のタイトルはインパクトがありました。『Calling, Spirituality and Religion in Career Development』

天職の探求



図：天職の探求

というタイトルでした。そもそも、そういう文言の組み合わせは見たことがありませんでした。そこで、何だろうと思い、彼の本を買って読んでみました。『Make Your Job a Calling』という標題の本で、意味は、『あなたの仕事を天職にしよう』といったところです。内容はこれまでにキャリア教育では読んだことのないような宗教的要素がブレンドされたものでした。これはプロテスタント系の考え方なんだろうと思います。プロテスタントの人は自分の職業を天職と考えようという教えを受けているようです。しかし、そうした宗教色を割り引いても、心理学的に非常にインパクトのある内容の本でした。ちょうど自分の仕事の来し方や現職の意味といったことを考えていたときだったので、私は非常に強い刺激を受けました。「自分にとって天職とは何だろう」ということを今年の一月くらいから時々考えるようになりました。

本の中では、『The Moon and Sixpence（月と六ペンス）』というサマセット・モームの小説（図中左下の本）を紹介しています。私は訳本で読みました。その主人公はチャールズ・ストリックランドという、ポール・ゴーギャンをモデルとしたとされる人物です。成功したビジネスマンだったストリックランドが、妻子を放り捨てて画家の道に飛び込む。そして画家として南の島タヒチに行き、現地の娘と結婚して家族をもうけ、最後は大変な病気を患って亡くなるという話です。『Make Your Job a Calling』で提起されているのは、「ストリックランドは天職を得たと言えるのか」という命題です。ストリックランドは自分の望んだ方向に進んでいます。自分がこれまで獲得したものを放擲して、画家の道突き進んでいます。しかし、ストリックランドにとって画家は天職と言えるのか、ということをディクさんは問題提起しているのです。彼はこの本の中で天職の条件を三つ挙げています。

一つ目は「Calling」です。これは呼びかけの意味の「Calling」です。神様からの「Calling」です。神父や牧師といった宗教家の中には、「神の声を聞いてその職についた」と申告する人が、それほど珍しくない頻度で存在

するようです。神の声を直接聞かないまでも、周囲のある人を媒介として神の教えを聞いたように思う、ということもあります。「現職は自分の天職だな」と思い当たる契機があるものだという趣旨です。

二つ目は、「現在の職業に生きがいを感じられている」という条件です。先ほど私は、この大学での学生指導が楽しいと言いましたが、それも生きがいの一つの例といえます。卒論指導や大学院入試対策の指導などで、学生さんといっしょにいろいろな勉強することは、私にとっては時間の経過を忘れさせるほどの楽しさや、やりがいを感じさせてくれる活動です。

さて、今までのところは自分中心の条件だったのですが、三つ目としては「他者指向性」という条件が挙げられています。つまり「自分の仕事は世間の為になっているのか？」という点が重要だということです。他者指向性を欠く営みは天職とはなり得ないということですが。

以上を要約すると、「どこかからお呼びが掛かってやっていること（条件一）が、自己親和的で（条件二）、世の中の為になっている（条件三）」ということが天職の条件だ」とデイクさんは指摘しているのだと思います。私もそのとおりだと思います。それからするとストリックランドは、自分中心のことは考えているけれど、放り捨てた家族のことなどは全然考慮していないわけなので、彼は天職を得たとは言えないのではないかと、というのがデイクさんの主張だと思います。

ここからは妄想の世界です。順番に見ていきます。私はこの一年間、学生さんのことを見ていろいろな考えたわけです。今の時期、四年生は就職活動をしています。また、私の所属している心理コースでは卒論が必修です。つまり就職活動と卒論を同時に二つ進めなければなりません。昨年の四年生を見ると、「就活があるから卒論は後回しです」、「資格試験を受けるから卒論ばかりやっているわけにはいきません」などと言う人がいるのが気に

なっていました。「私は同時に二つのことはできませんから」と抜け抜けと言います。それは違うのではないかと私は思いましたが、昨年度は私自身が新参者の一年生だったので、「郷に入っては郷に従え」と考えて、あまりそのことを強く言わずに遠慮していました。しかし、そうした学生さんは、結局のところ、いずれも首尾という結末だったのです。例えば、卒論の詰めの甘い学生は、資格試験も不合格、就職もあやふや、ということがあったので、これではいけない、今年はこのことをはっきりと言わなければいけないと思い、考えを変えました。

そこでこのバッジ（図の右上隅）を作りました。そして、私のゼミに來た学生にはこのバッジを提供することにしました。これには諺が書いてあります。「One who does not run after two hares will catch neither.」これは古代ローマの諺である「二兎を追う者は一兎をも獲ず」という戒めを振ったものです。私は、オリジナルに「does not」を加えて、「二兎の兎を追いかけない者は、一兎も得ない」という意味にして、私のゼミの標語にしました。このバッジは私のデザインです。

中央のピンク地に描かれた薄紫のギリシャ文字「Ψ（プサイ）」は、Psychologyの頭文字「P」に相当します。仙台白百合女子大学の心理学の鈴木研究室という意味です。なお、中央のピンク色は女性の象徴ということですが。

兎が二羽いるところがミスです。どういふことかといいますと、一羽は「自己兎」です。自分が何に興味があるか、何をしたいかを意識して追求するのは大事なことです。それがわからないという人もいます。「いったい私は何が好きなんでしょう」などと、抜け抜けと言う人もいます。言うまでもなく、そんなことではだめなわけです。

もう一羽は「他者兎」です。例えば、幼稚園児に「将来は何になるの」と聞くと、「ケーキ屋さん」などと答えます。「どうして」と聞くと、「ケーキが好きだから」と答えます。しかし、その将来構想には、「好きなかただけで販売にはならないという現実はどう対処するか」という視点が欠落しています。然るべき能力と蓄積が備わってい

なければ、ケーキ屋さんとして成功することなど期待できません。ですから、鈴木ゼミでは、「二匹を追いかける！」と言うのです。「自己兔」ばかり追いかけるだけの自己満足ではだめなのです。自分が世の中にどう受け入れられるか、ということと同時に検討していかなければだめだ。つまり「他者兔」も追え！ということを強調しているわけです。なお、なぜ兔なのかということですが、連想元は『月と六ペンス』です。月といえば兔ということから兔を取り込みました(⑥、⑨)。

次は、円周に沿った紺地に白の部分の意味です。鈴木ゼミの学生さんは、しばしば「声が小さい」と注意されます。「語尾、主語をはっきり言え！ 物事ははっきり言え！」とさんざん言われます。だから、四年生くらいになるとだぶ変わります。聞くところによると、友達などから、「鈴木ゼミに行って性格がだいぶきつくなったんじゃないの？」と言われるらしいのですが、それくらいでちょうど良いと思っています。紺地に白でくっきりと表示された文字は、そういうことを表しています。なお、紺色は白百合のスクールカラーだそうです。赤い枠は円満な人格の完成の象徴です。

そして最後は、⑩「みんなそれぞれ天職へ！」というところです。学生さんも私自身も、「二兎」を追いかけることで、それぞれの天職を見つけられたら幸せだろうという趣旨です。それに向けて頑張っていきましょうという趣旨です。

このバッジは以上のような意味合いを込めて作ったもので、私のゼミの所属学生全員に配っています。バッジの趣旨を理解して鋭意適用する学生さんにはきつと良い果実がもたらされることでしょう。一方、もらったことも忘れてどこかに紛らせてしまったような学生さんには、どんな結末が訪れるのでしょうか？ 私としては、この仮説が事実によってどのように立証されるのか、対照実験の結果が出るのを心待ちにしている今日この頃です。

(心理福祉学科特任教授)